

## 32

## 後藤良山の系譜と一族の墓について

今井 秀

今井整形外科

はじめに後藤良山の系譜(祖先と子孫)を詳らかにし報告する。なかでも良山の祖先は後藤祐乗を始祖とする京の三大長者の一家「彫金後藤家」と姻戚関係にあるという説があるが、この真偽についても推考した。

また後藤家の墓は江戸時代には上品蓮台寺(通称十二坊)子院の普門院墓地にあったが、明治初期に当時大慈院があった場所に移された。この際に一族の墓の一部は亡失したと推測され、残った墓も散在している。このたびその現状を報告する。

良山の祖先は、椿庵の『先府君養菴先生行状』に高祖父乗三と曾祖父光有が相共に関白豊臣公に仕え、京師で恭しく命を蒙り金貨を鑄造し、その後祖父正次は7歳の時怙恃(頼りの父光有)を失くし、大福人(母)とともに大舅(義祖父)の後藤徳乗の家で育てられ、仕官せず質素な生活を送ったことが記され、後藤家と「彫金後藤家」が姻戚関係にあったとされる。さらに正次の三男光長(良山の父)は13歳の時江戸に出て常盤橋(現在日銀のある金座跡地)近くに移り住み、金工光次の禄を承けたことが記される。

しかし、香川修徳が撰した『養菴先生後藤君墓誌銘』と祖父正次の墓碑銘にはこうした記載は見られない。また、『刀装金工事典』には戦国時代に後藤乗三、光有という金工は存在せず、「大判座後藤家略系譜」に徳乗の四人の娘の嫁ぎ先が載っているが、光有に嫁いだ者はいない。また金工光次は1625年に没しており、年代が合致しない。私はこの行状は椿庵が話を盛ったものと推量しているが、今後更なる検証が望まれる。

良山の子孫は、次男の椿庵が医家後藤家の二代を継ぎ、父の“一気留滞説”を継承し灸法も盛んに行い、後藤流を確立して医名を落とさなかった。嫡男夭逝のため庶子慕庵が家督を継いだ。慕庵が3歳の時椿庵は42歳で早世した。そのため足立栄庵が後藤家の乞いに応じ呼び戻され、三年間師門を守った。その後栄庵は慕庵の叔父季介(良山四男)に後事を託し、季介が慕庵を養育した。三代を継いだ慕庵は医理に深く通じた懇切丁寧な治療で知られ、門人は四百余人にも達し、家名を再興した。嫡男夭逝のため、慕庵は京都の儒者芥川丹邱の末子徹(号が栗庵)を養子とし四代を継がせた。五代は傷寒論の註解書『五書別論』を著した栗庵の嫡男古漁が継いだ。しかし医家後藤家はその後絶家したのか、日本医学史上から忽然と姿を消している。

後藤家の墓は大慈院墓地北面にあり、ほぼ中央に良山の「養菴先生後藤君」墓、その南隣に伯父母、祖父母、「宗山後藤正英」墓と四基の墓が並び、その南10歩に良山次男「椿庵先生」墓がある。また「椿庵先生」墓の通路を挟んだ西の一画には良山母と曾孫「栗庵先生」墓が、さらに東18歩に「彫金後藤家」始祖の後藤祐乗の墓がある。その南隣りに五代徳乗他の墓域があり、良山妻と良山長男「得菴」の墓はこの中に紛れてあった。

近年経年劣化により砂岩でできた墓石表面の剥離が進み、2017年の台風5号で「椿庵先生」墓が、さらに翌年の台風21号で良山母の墓が倒壊した。寺のご好意で修復されたが、今後も自然災害による倒壊や剥脱の危険性は一層増すと思われた。

浅田流漢方医家で医史学者の安西安周氏は「後藤家の墓所に就て筆者の痛感したことは、千秋名医の墓域としてあまりに似つかわしくないといふことである。墓を移動することはいろいろの規定があって容易ではないであろうが、何とか良山の墓を中心として一か所にまとめ、二三の樹木などを植えるなりして、その先哲巨人の遺香を発揚したいものと思う」(「京阪名医掃苔記」1940年)と述べている。

私も同じ想いで、以前より大慈院墓地に散在する後藤家の墓を一か所にまとめ、倒壊や剥脱に対する措置を講じる必要があると痛感していた。幸い上品蓮台寺住職夫妻のご厚志と日本医史学会関西支部のご支援をいただき、後藤家の墓の整備に着手したところである。